

小田原へ着いたのは五時。驛の前で天井を食つて、日が暮れて遊廓へ行く。

カサブタの付いた膿を何處へも落す事の出来ない悲哀に、僕の心は潰れた。

肌自慢の女郎と、長時間に渡る交合をして、下腹に染み付く快感を、且つて覚えなかつた程味はひ、僕は弟と、國の女の事を思つてねた。

箱根行の電車の所へ行つてみた。

けれども無想庵のところへ、も一度行つてみよう。

彼はベスト菌を恐れてゐないのか知ら。

アンバンの中のアンは、何時でも腐敗つてゐないとは限らない。

二宮までの切符を買つて乗る。骨が液體になつた程疲れてゐる。

僕は目前のものを見ても、何もかもが一色に見えて、頭は水枕のやうにゆれてゐた。

小さな焼杉の門をくゞつて、無想庵のとこの玄關からおとなふ。

二三度呼んでも返事がない。誰も居ないのか静かだ。